

青年期におけるアイデンティティ形成に ソーシャル・サポートがおよぼす影響

慶 徳 め ぐ み

(大学院発達教育学研究科児童学専攻)

森 下 正 康

(児童学科教授)

本研究は、ソーシャル・サポートが、青年期のアイデンティティ形成にどのような影響をおよぼすかを明らかにすることを目的とした。大学生を対象に質問紙調査を行い、記入漏れのない女性191名を分析の対象とした。分散分析の結果、児童期および青年期において良好なサポート関係をもつことが、アイデンティティと時間的展望を高めることが示された。また、重回帰分析の結果、児童期と青年期では重要度の高いサポート源が異なっていた。これらをふまえて総合的にパス解析を行った結果、児童期においては母親と重要な他者のサポートが、青年期においては友人のサポートが、アイデンティティを高め、それを介して基本的信頼感と時間的展望を高めていた。これらの結果から、児童期および青年期のソーシャル・サポートとアイデンティティ形成の関係について、その個人が自身の状況に見合った良好なサポート関係を大切な人との間で築くことが、安定したアイデンティティの形成に繋がることが示唆された。

キーワード：青年期、ソーシャル・サポート、アイデンティティ、基本的信頼感、時間的展望

問題

アイデンティティとは、幼児期以来形成されてきた様々な同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、自我の統合された状態である(杉村, 2001)。この時に体験されるアイデンティティの感覚(a sense of identity)とは、「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力(心理学的意味での自我)が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信」をいう(Erikson, 1959 小此木編訳1973)。

エリクソンは、すべての子どもは発達の内的法則(ground plan)をもって生まれ、養育者や社会、文化などと相互に影響しあう中で、系列的な段階にしたがって発達が進んでいくと考え、人間の生涯発達を心理社会的な相互作用による漸成発達であるとする漸成発達理論を構成した。その漸成発達の様相は、漸成図式によってその全体構造が示されている。図式には、対

角線上に各発達段階において優勢になる危機が並んでおり、身体的・認知的・情緒的・社会的発達が進んだある段階にその危機を迎える。また、各発達段階において優勢になる各構成要素は、それぞれ関連し合っており、ある段階における危機の達成は、その後の危機の解決のあり方に影響をおよぼすという(谷, 2008)。エリクソンは、その達成の程度を「相対的な達成」と表現している。これは、各段階の危機が肯定的側面と否定的側面をもっており、肯定的側面が否定的側面を上回るようなバランスをもつ状態が望ましいことを表現している。また、以前優勢になった段階の構成要素は、その後の段階の見地から再び問い直されることになるため、以前の段階において問題があったとしても、その後の段階の危機を通して何らかの解決を見いだせる時には、以前の段階の危機はより達成されたものになるという可能性も、この表現には含意されている(谷, 2008)。

アイデンティティの確立は、青年期の重要な達成課題であるとされ、これまでに青年期を対象とした研究が積み重ねられてきた。しかし、西洋的な男性優位の個人主義の中で、自立や他者からの分離を発達之最優先課題としてきたため、他者との関係性の側面は見逃されてきた(杉村, 1999)。

近年では、青年期のアイデンティティ研究において、社会や関係性に対する関心が高まってきた。少子高齢化や地域社会のつながりの希薄さ、ライフコースの多様化など、社会が目まぐるしく変化している中で、「自分とは何か」という問いは、よりいっそう重要な課題としてとらえられるようになってきていると思われる。杉村(1998)は、その社会の中でも青年にとって最も身近な対人的文脈に注目し、関係性の観点から研究を試みている。そして、身近な他者との関係性は、社会的文脈での最も基本的な単位であると同時に、全体的な問題にもつながる視点であるとし、アイデンティティ探求における関係性の重要性を主張した。

そこで、本研究では青年期に焦点をおき、他者との関係性をとらえる1つの視点としてソーシャル・サポート(social support)を取り上げ、アイデンティティ形成にソーシャル・サポートがどのような影響をおよぼすのかを検討したい。Cohen & Willsによれば、人が自らのアイデンティティの安定を図りつつ、自己に不足している資源を求める状況において、ソーシャル・サポートはアイデンティティの安定と補充という効果をおよぼしうるといふ(中村・浦, 2000)。このような変化の多い社会状況においても、まわりからのソーシャル・サポートが充実していれば、それらのサポートに支えられながら、安定したアイデンティティの形成が進んでいくのではないかと考える。また、エリクソンが「相対的な達成」と表現していることから、過去の関係性において問題があったとしても、その後の関係性のあり方によってアイデンティティ形成の方向性は変化する可能性があるのではないだろうか。すなわち、過去においてたとえ十分なソーシャル・サポートを受けていなかったと

しても、青年期において十分なソーシャル・サポートを受けられていれば、アイデンティティの形成も良好に進んでいくのではないかと考える。したがって本研究においては、児童期と青年期におけるソーシャル・サポートについて調査し、アイデンティティ形成との関連をみることにする。

また、ソーシャル・サポート研究において、誰との関係におけるサポートなのかというサポート源の問題が従来から指摘されており、なかでも“家族”と“友人”というカテゴリーは最も一般的な分類として用いられてきた。福岡・橋本(1997)は、これらサポート源が持つ意味は受け手と送り手の関係性、とりわけ社会的・発達の文脈によって大きく異なるとして、大学生と中年期の男女において家族および友人のサポートの比較研究を行っている。その結果、大学生と中年期の男女において、それぞれ特徴的なパターンをもつことが示された。本研究においても、家族とのかかわりが大きいと考えられる児童期と、対人関係が広がりをもつ青年期では、サポート源との関係性は変化すると考えられる。

以上のことをふまえて、児童期および青年期のソーシャル・サポートのあり方をサポート源別に調査し、青年期のアイデンティティ形成にどのような影響をおよぼしているかを検討する。

次に、青年期におけるアイデンティティ感覚の1つの側面として、時間的展望の問題が挙げられる。時間的展望とは、Lewinによると、ある時点における心理学的過去および未来に関する見解の総体を指し、時間を過去・現在・未来というまとまりで捉えたときの相互関係を問題にする視点である(白井, 2006)。杉山(1995)は、エリクソンの理論において、アイデンティティ感覚の1つの側面は、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意識と確信であり、そのような確信の上に立って個人の未来というもののはっきりと具体性をもって現実的なものとなると示唆されていることから、時間的展望の問題は青年期のアイデンティティ形成の1つの側面

として考えられるとした。また、谷（1998）は、エリクソンの理論において乳児期の危機「基本的信頼 vs 基本的不信」という問題が、青年期において「時間的展望 vs 時間的展望の拡散」という危機で顕在化するということから、時間的展望と基本的信頼感の間には、深い関わりがあると考え、研究を行った。そして、乳幼児期の基本的信頼感の問題が、青年期において時間的展望の問題として顕在化するというを明らかにした。さらに、白井（2006）は、現代社会における青年が抱えている進学競争などの問題を時間的展望の視点から検討し、青年期には時間的展望が拡大し現実への直面から不安を増大させるが、この不安と向き合うことができると初めて確かな希望を手に入れることができると述べている。そして、青年が自分の不安と向き合い、自分なりの生き方を開く方向にいくためには、青年なりの生き方を援助する大人や仲間との出会いが必要であると述べている。

これらのことから、基本的信頼感、アイデンティティ、アイデンティティ感覚の1つの側面としての時間的展望感覚の間には、密接な関係があると考えられる。しかし、それら3つの感覚の間にどのような関係性があるのかについては明確ではない。すなわち、基本的信頼感がアイデンティティ感覚や時間的展望感覚に影響をおよぼすのか、または青年期の達成課題であるアイデンティティ感覚が基本的信頼感と時間的展望感覚に影響をおよぼすのか、というプロセスの問題を明らかにする必要があると思われる。

さらに、関係性を捉える1つの視点として取り上げたソーシャル・サポートは、基本的信頼感、アイデンティティ感覚、時間的展望感覚それぞれにどのような影響を与えているのだろうか。

これまでにそれらの要素を取り入れてアイデンティティ形成について研究したものは少ない。したがって、本研究では、他者との関係性をとらえる1つの視点としての児童期および青年期のソーシャル・サポートが、基本的信頼感、アイデンティティ感覚、時間的展望感覚に、どのような影響をおよぼしているのか、また、これ

ら3つの感覚の間には、どのような関係性の構造があるのかを実証的に明らかにすることを目的とする。

以上のことから、本研究においては、次のような仮説を立てた。

仮説1. 児童期においてまわりから受けたサポートの程度が少なくても、青年期においてまわりからのサポートが期待できれば、基本的信頼感、アイデンティティ感覚、時間的展望感覚はともに高い。

仮説2. 児童期においては父親・母親からのサポートが、青年期においては友人・重要な他者からのサポートが、基本的信頼感、アイデンティティ感覚、時間的展望感覚に対して強い影響をもたらす。

方法

1. 調査対象

京都市内3校の大学生（1～4回生）を対象とした。各大学の学生に質問紙を配布し調査を実施、記入後その場で回収した。その結果、合計335名のデータが得られた。このうち、男性データは少なかったため分析には含めず、完全に記入漏れのない女性191名をデータ分析の対象とした。

2. 調査時期

2010年7月9日～7月20日

3. 調査内容

(1) ソーシャル・サポート

児童期および青年期のまわりからのサポートを測定するために、久田・千田・箕口（1989）によって作成された「学生用ソーシャル・サポート尺度」を用いた。これは、「普段から自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえるという期待の強さ」によって、ソーシャル・サポートの程度を測定する尺度である。「情緒的」「道具的」といったサポート内容の区別はなく、サポート源を分けて測定できるという特徴をもつ。久田らの尺度は、対象を父親・母親・きょうだい・学校の先生・知人友人としていたが、本研究では父親・母親・同性の友

人・その他重要な他者の4対象に変更した。

本研究では児童期において実際にサポートをどの程度受けていたかについて、青年期においてサポートをどの程度期待できるかについて回答を求めた。尺度16項目のうち7項目と、新しく作成した逆転項目3項目の計10項目を用いて、過去および現在のソーシャル・サポートの程度を測定した。各項目に対する回答は、3：いつもそうだった・きっとそう、2：たいていそうだった・たぶんそう、1：あまりなかった・たぶんちがう、0：全くなかった・絶対ちがう、の4段階評定で回答を求めた。また、重要な他者については、それが誰であるかについても回答を求めた。なお、対象がない等の場合には、空欄にしてもらうよう伝えた。

(2) 多次元自我同一性尺度

青年期におけるアイデンティティ感覚を測定するために、エリクソンの理論に基づいて谷(2001)が作成した、青年期における同一性の感覚を測定する尺度を用いた。エリクソンの記述に基づき、同一性の感覚を「自我同一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4次元からとらえるという特徴を持っている。

尺度20項目のうち16項目と、本研究の目的に沿うように新しく作成した4項目の計20項目を用いた。各項目に対する回答は、4：当てはまる、3：やや当てはまる、2：どちらともいえない、1：やや当てはまらない、0：当てはまらない、の5段階評定で回答を求めた。

(3) 時間的展望体験尺度

アイデンティティ感覚の1つの側面である時間的展望感覚を測定するために、白井(1994)によって作成された、過去・現在・未来にわたって時間的展望を測定する尺度を用いた。「現在の充実感」「目標志向性」「過去受容」「希望」の4側面から測定できるという特徴がある。尺度18項目のうち17項目を抜粋して用いた。各項目に対する回答は、4：当てはまる、3：やや当てはまる、2：どちらともいえない、1：やや当てはまらない、0：当てはまらない、の5段階評定で回答を求めた。

(4) 対人信頼感尺度

基本的な信頼感を測定するために、堀井・植谷(1995)によって作成された、人間一般に対する基本的な信頼感を測定する尺度を用いた。ここでいう信頼感とは、「他の人や集団の言葉や約束、口頭や文書による陳述をあてにすることができるという、個人あるいは集団が抱く一般化された期待」と定義されている。本研究ではこの定義から、尺度を「基本的信頼感」としてとらえ、尺度17項目をそのまま用いることとした。各項目に対する回答は、4：当てはまる、3：やや当てはまる、2：どちらともいえない、1：やや当てはまらない、0：当てはまらない、の5段階評定で回答を求めた。

結果

1. 尺度の作成

それぞれの尺度項目について、まず主成分分析を行い固有値の変動を参考にして因子数を決め、次に最尤法による因子分析の後プロマックス回転を行った。パターン行列に沿って尺度を作成し、 α 係数を算出した。

(1) 児童期におけるソーシャル・サポート

児童期における父親・母親・同性の友人・重要な他者からのソーシャル・サポートに関する項目の因子分析の結果、それぞれ1因子が得られた。これらの因子をそれぞれ「過去父親サポート」「過去母親サポート」「過去友人サポート」「過去重要な他者サポート」と命名した。その後、 α 係数求めたところ、父親(.916)母親(.904)友人(.853)重要な他者(.858)といずれも高い信頼性が確認された。

(2) 青年期におけるソーシャル・サポート

青年期における父親・母親・同性の友人・重要な他者からのソーシャル・サポートに関する項目の因子分析の結果、それぞれ1因子が得られた。これらの因子をそれぞれ「現在父親サポート」「現在母親サポート」「現在友人サポート」「現在重要な他者サポート」と命名した。その後、 α 係数求めたところ、父親(.937)母親(.918)友人(.862)重要な他者(.862)といずれも高い信頼性が確認された。

(3) アイデンティティ感覚

アイデンティティ感覚に関する因子分析の結果、2つの因子が得られた。これらの因子に、「自分らしさ」「自他不一致」と命名した。その後、各因子に高く負荷する項目（原則として0.30以上）を用いて尺度を作成し、 α 係数を求めたところ、第1因子自分らしさ(.916)第2因子自他不一致(.833)といずれも高い信頼性が確認された(表1.)。

(4) 時間的展望感覚

時間的展望感覚に関する因子分析の結果、2つの因子が得られた。これらの因子に、「希望目標」「充実感」と命名した。その後、各因子に高く負荷する項目を用いて尺度を作成し、 α 係数を求めたところ、第1因子希望目標(.898)第2因子充実感(.751)といずれも高い信頼性が確認された(表2.)。

(5) 基本的信頼感

基本的信頼感に関する因子分析の結果、3つの因子が得られた。これらの因子に、「不信」「自己中心」「誠実」と命名した。その後、各因子に高く負荷する項目を用いて尺度を作成し、 α 係数を求めたところ、第1因子不信(.782)第2因子自己中心(.683)第3因子誠実(.605)と、第1因子は高い信頼性を示し、第2因子と第3因子は必ずしも高い値とは言えなかった(表3.)

表1. アイデンティティ感覚に関する尺度項目

- 第1因子【自分らしさ】(α .916)
- 1 自分が望んでいることがはっきりしている。
 - 2 自分がすべきことがはっきりしている。
 - 3 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。
 - 4 これから先も自分らしくいられる気がする。
 - 5 現実の社会の中で、自分の可能性を十分に実現できると思う。
 - 6 自分は自分だと感じる。
 - 7 現実の社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある。
 - 8 自分は自分らしく生きてきたと感じる。

- 9 自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。*
- 10 今のままでは次第に自分を失ってしまうような気がする。*
- 11 いつの間にか自分が自分でなくなってしまったような気がする。*
- 12 人前でも本当の自分でいられると思う。
- 13 自分らしく生きていくことは、現実の社会の中では難しいと思う。*

第2因子【自他不一致】(α .833)

- 1 自分の周りの人々は、本当の私を分かっていると思う。
- 2 本当の自分には人には理解されないだろう。
- 3 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。
- 4 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。*
- 5 過去において自分をなくしてしまったように感じる。
- 6 自分が何を望んでいるのか分からなくなることがある。
- 7 自分が何をしたいのかよく分からないと感じるときがある。

*逆転項目

表2. 時間的展望感覚に関する尺度項目

- 第1因子【希望目標】(α .898)
- 1 私の将来は漠然としていてつかみどころがない。*
 - 2 私には将来の目標がある。
 - 3 将来のことを考えて今から準備していることがある。
 - 4 私には大体の将来計画がある。
 - 5 将来のことはあまり考えたくない。*
 - 6 十年後、私はどうなっているのかよく分からない。*
 - 7 自分の将来は自分で切り開く自信がある。
 - 8 毎日がなんとなく過ぎていく。*
 - 9 私の将来には希望が持てる。
 - 10 私には将来がないような気がする。*

第2因子【充実感】(a.751)

- 1 過去のことはあまり思い出したくない。*
- 2 私は自分の過去を受け入れることができる。
- 3 今の生活に満足している。
- 4 今の自分は本当の自分ではないような気がする。*
- 5 毎日の生活が充実している。
- 6 私は過去の出来事にこだわっている。*

表3. 基本的信頼感に関する尺度項目

第1因子【不信】(a.782)

- 1 人は、誰かに利用されるかもしれないと思いい、気をつけている。
- 2 人は、他の人を信用しないほうが安全であると思っている。
- 3 人は、他の人の親切に下心を感じ、気をつけている。
- 4 人は、他の人に対して、信用してもよいということがはっきり分かるまでは、用心深くしている。
- 5 人は、他の人を援助することを内心では嫌がっている。
- 6 人は、頼りにできる人がわずかしかない。

第2因子【自己中心】(a.683)

- 1 人は、他人の権利を認めるよりも自分の権利を主張する。
- 2 人は、厄介な目にあわないために、嘘をつく。
- 3 人は、口先ではうまいことを言っても、結局は自分の幸せに一番関心がある。
- 4 人は、チャンスがあれば税金をごまかす。
- 5 人は、多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする。

第3因子【誠実】(a.605)

- 1 人は、ふつう清く正しい生活を送る。
- 2 人は、ふつう他の人と誠実に関わっている。
- 3 人は、基本的には正直である。
- 4 人は、自分がするといったことは実行する。

表4. アイデンティティ感覚と時間的展望感覚の相関

	自分らしさ	自他不一致	希望目標	充実感
自分らしさ	1.000	-.693**	.779**	.674**
自他不一致	-.693**	1.000	-.549**	-.666**
希望目標	.779**	-.549**	1.000	.506**
充実感	.674**	-.666**	.506**	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$

2. 重要な他者の内訳

重要な他者のサポート質問項目において、それが誰であるかについての記述を集計した。

「きょうだい」が児童期77名・青年期74名と、ともに最も多く、次いで「祖父母」が児童期67名・青年期46名であった。「先生」は児童期19名・青年期8名と、青年期になると減少が見られた。また青年期には、「恋人」(24名)や「異性の友人」(4名)が新たに現れ、青年期の対人関係の広がりがかがえた。その他については分類することが難しく、今後、内訳別の分析は行わないこととした。

3. 過去および現在のサポートと基本的信頼感・アイデンティティ・時間的展望

過去および現在のサポートが、基本的信頼感、アイデンティティ、時間的展望にどのような影響をおよぼしているかについて検証した。

まず、過去および現在の4対象をまとめたソーシャル・サポート総得点について、それぞれ上位(H)群と下位(L)群、約半数ずつの2つのグループに分類した。また、各尺度間の相関が高いことから、基本的信頼感尺度の3因子、アイデンティティ感覚尺度の2因子、時間的展望感覚尺度の2因子の得点を、をそれぞれ足して、「基本的信頼感」得点、「アイデンティティ」得点、「時間的展望」得点とし、過去および現在のサポートを独立変数、基本的信頼感、アイデンティティ、時間的展望を従属変数として2要因の分散分析を行った。

その結果、基本的信頼感を従属変数とした場合、すべての要因に有意差はみられなかった。アイデンティティを従属変数とした場合については、過去サポート ($F(1,187) = 7.888, p < .01$)、現在サポート ($F(1,187) = 6.951, p < .01$)にそれぞれ有意差がみられた。交互作用はなく、過

去・現在サポートもともに、H群の方がL群よりもアイデンティティ得点が高いということが示された(図1.)。また、時間的展望を従属変数とした場合については、過去サポート(F(1,187)=10.085, p<.01), 現在サポート(F(1,187)=5.834, p<.05)にそれぞれ有意差がみられた。交互作用はなく、過去・現在サポートともに、H群の方がL群よりも時間的展望得点が高いということが示された(図2.)。

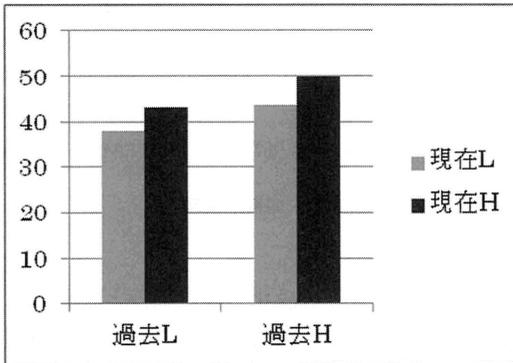


図1. 過去・現在のサポートとアイデンティティ

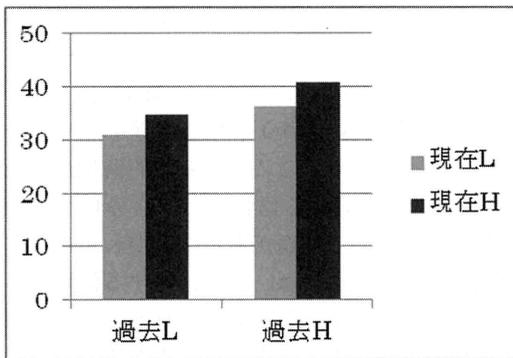


図2. 過去・現在のサポートと時間的展望

4. サポート源と基本的信頼感・アイデンティティ・時間的展望

児童期および現在において、誰からのサポートが基本的信頼感、アイデンティティ、時間的展望に対し影響をおよぼしているかを検証するために、過去および現在の、父親・母親・友人・重要な他者サポートを独立変数、基本的信頼感、アイデンティティ、時間的展望を従属変数として、重回帰分析(ステップワイズ法)を

行った。(表5.)

基本的信頼感に影響をおよぼしていたのは、過去の友人サポートと現在の重要な他者サポートであり、アイデンティティと時間的展望に影響をおよぼしていたのは、過去の母親と重要な他者サポート、現在の友人サポートであった。基本的信頼感については、アイデンティティと時間的展望とは異なるサポート源が影響していた。

表5. サポートと各尺度得点の重回帰分析結果

従属変数 独立変数	従属変数		
	基本的信頼感	アイデンティティ	時間的展望
過去父親			
過去母親		.137*	.148*
過去友人	.150*		
過去他者		.200**	.233**
現在父親			
現在母親			
現在友人		.377****	.311****
現在他者	.152*		

*p<.05, **p<.01, ****p<.001

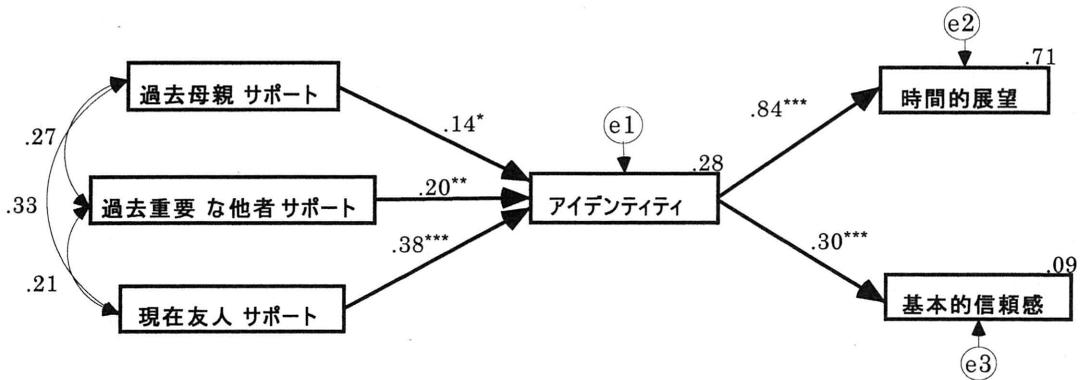
5. 総合的検証

仮説1と仮説2を総合的に検証するために、Amosを用いてパス解析を行った(大石, 2009・小塩, 2008, 豊田, 2007)。

分散分析と重回帰分析を参考にしながら仮説に沿ってモデルを作成し、最尤法にて分析した結果、重回帰分析で基本的信頼感と関連がみられたサポート源のパスは有意ではなかった。

重回帰分析を行った結果、アイデンティティと時間的展望については、ともに類似した結果が示されたことから、それらの結果を参考にしながら再度仮説に沿ってモデルを作成し、最尤法にて分析した。その結果、最終的に最も適合度の高い図3のような結果を得た。

モデルの適合度をみると、いずれも高い値を示しており、適切なモデルであることが確認できた。過去の母親サポートと重要な他者サポート、および現在の友人サポートが、アイデンティティを高めていた。さらにサポートはアイデンティティを介して基本的信頼感と時間的展望を高めていた。



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

GFI = .989 AGFI = .967 CFI = 1.000 RMSEA = .000

図3. ソーシャル・サポート—アイデンティティ—基本的信頼感・時間的展望

考察

本研究の目的は、エリクソンの理論をふまえて、関係性の観点から青年期のアイデンティティ形成にソーシャル・サポートがおよぼす影響を実証的に検証することであった。

本研究において、第一に、児童期および青年期におけるサポートと基本的信頼感、アイデンティティ、時間的展望に関して分散分析と重回帰分析を行った結果、アイデンティティと時間的展望については、ともに類似した結果が示された。さらに、それらの結果を参考にして行ったパス解析では、アイデンティティが時間的展望を高めていた。これらのことは、アイデンティティ感覚の1つの側面として時間的展望感覚があるとする漸成発達理論を支持するものであると考えられる。それに対し、サポートと基本的信頼感についての重回帰分析の結果からは、アイデンティティ、時間的展望とは異なるサポートとの関係がうかがわれた。しかし、Amosを用いて総合的に分析を行った際には、サポートと基本的信頼感の間には直接的な関連はみられなかった。ここに、本研究で用いた基本的信頼感の尺度の選択が、果たして適切であったかどうかという問題がある。この元の尺度は「対人信頼感尺度」というもので、個人あ

るいは集団が抱く一般化された期待と定義されているものである。本研究ではこれを基本的信頼感ととらえた。しかし、エリクソン(1959, 小此木編訳1973)は基本的信頼感について「他人に関しては一般に筋の通った信頼 reasonable trustfulness を意味するようなものを、そして自分自身に関しては信頼に値する trustworthiness という単純な感覚を意味したい」と述べており、ここから基本的信頼感には“他者や世界に対する信頼”と“自分自身に対する信頼”との二側面があることがわかる。本研究で測定したものは、他者に対する信頼という一側面だけであった可能性が高く、また、基本的信頼感ではなく、実際の対人関係における価値観や態度を測っていた可能性もある。このことをふまえると、本研究の結果だけではサポートと基本的信頼感の関係を結論づけることはできないだろう。

第2に、パス解析の結果、最終的に図3のようなモデルを得た。児童期においては母親と重要な他者のサポートが、青年期においては同性の友人のサポートが、アイデンティティを高め、さらにサポートはアイデンティティを介して基本的信頼感と時間的展望を高めていた。

まず、サポート源について、児童期において

は母親と重要な他者からのサポートがアイデンティティに対して効果をもっていた。児童期における重要な他者の内訳において、「きょうだい」と「祖父母」が最も多かったことから、児童期においては、対人関係が広がりを見せる時期ではあるが、「家族」は依然として児童期の子どもにとって生活の基盤であり（小嶋・森下, 2004）、重要な意味をもつものであると考えられる。本研究の結果から、児童期のサポート関係が、青年期のアイデンティティ形成の基盤となることが示唆される。

青年期においては同性の友人からのサポートがアイデンティティに対して効果をもっていた。これは、友人や恋人との関係の変化がアイデンティティ探求に深く関わることを示した杉村（2001）の先行研究と類似する。青年期は児童期よりもより一層対人関係が広がりを見せ、自立へ向かう時期であるので、同性の友人など家族とは異なる様々な関係性の中でサポート関係を築くことが、アイデンティティを探求し形成する機会になっていく可能性が示唆される。ただし、杉村（2001）が指摘するように、家族関係の質的な特徴は、アイデンティティ形成プロセスの全般にわたって根底にあるために認識されにくいという可能性があり、家族とのサポート関係も青年にとって依然として重要な効果をもつものであると思われる。

次に、パス解析の結果、アイデンティティは基本的信頼感と時間的展望を高めていた。これは、前述した基本的信頼感の尺度の問題もふまえると、青年期のアイデンティティが、それまでの経験から取捨選択して再構成されるとき、時間的展望も問い直され、他者に対する信頼感や実際の対人関係に対する価値観・態度にも影響をおよぼすという関係が考えられる。本研究のモデルでは、アイデンティティから基本的信頼感、時間的展望に対して一方向のパスが有意であったが、実際には相互に影響をおよぼす関係であるだろう。

児童期および青年期のソーシャル・サポートがアイデンティティを介して基本的信頼感と時間的展望に影響をおよぼしているという結果が

得られたことから、児童期および青年期に、その個人が自身の状況に見合った良好なサポート関係を大切な人との間で築くことが、安定したアイデンティティの形成に繋がることが示唆される。

以上のことにより、仮説1は分散分析の結果から、アイデンティティと時間的展望については支持された。仮説2はパス解析の結果から部分的に支持された。

このように、本研究では、児童期および青年期のサポート源の特徴と、サポートがアイデンティティを介して基本的信頼感や時間的展望感覚に影響をおよぼすという関係性の構造を実証的に示したことに意義があるといえる。

しかし、本研究は方法的にも内容的にも今後の改善点は多く、次のような検討課題が残された。

(1) 本研究では質問紙調査を行ったが、用いた尺度が適切であったかどうかという問題があった。今後はより理論や尺度を吟味して使用しなければならない。

(2) 男性データが少なかったため、本研究では男女を比較しての分析を行うことができなかった。性別によってサポートの関係性やアイデンティティは異なる可能性があるため、男性データをより多く集め、比較検討する必要がある。

(3) 本研究では、父、母と友人、重要な他者のサポートを同じ情緒的サポートの項目のみによって測定した。しかし、サポート源それぞれに求められるサポートの性質には何らかの違いがあるかもしれない、情緒的と道具的などサポート内容を区別して検討する必要がある。

(4) Sarason et al. (1991) は、知覚されたサポート自体が、内的ワーキングモデルなどのパーソナリティを反映していることを指摘した。本研究においても、そのようなパーソナリティを反映している可能性はあるため、今後はその点も考慮して変数を構成する必要がある。

(5) 本研究の被験者は大学1年生と3年生が大半を占めていた。しかし、白井（2003）が卒業前後4年間に渡ってアイデンティティと時間

的展望の規定関係を縦断的に調査した結果、大学3回生のアイデンティティ達成が4回生の希望を高め、大学4回生の時間的展望が卒業1年目のアイデンティティに影響を与えていた。このことから、大学4回生についても調査し、1回生と比較・検討することで違う結果が得られると予想され、今後の検討が必要である。

(6) 比嘉・岡本(2007)は、未来への展望の形成には、他者と出会うのみでなく、それを契機として自分自身の洞察を深め、その他者との関係に自分なりの意味づけを行っていくことが重要であると述べている。本研究においても、そのサポートを受けとる個人が、それをどうとらえて生かしていくか、他者と関わっていくかによって、アイデンティティの形成の方向も異なると考えられるため、今後はサポートを受けた後の点も含めた検討が必要である。

引用文献

- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. International University Press.
(エリクソン, E.H. 小此木啓吾(編訳) 1973 自我同一性 誠信書房)
- 福岡欣治・橋本 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャルサポートとそのストレス緩衝効果 心理学研究 68, 5, 403-409.
- 比嘉麻美子・岡本祐子 2007 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス 広島大学心理学研究 7, 227-243.
- 堀井俊章・植谷笑子 1995 最早期記憶と対人信頼感との関係について パーソナリティ研究 3, 1, 27-36.
- 堀洋道・山本真理子・松井豊 2000 心理尺度ファイル—人間と社会を測る— 垣内出版
- 小嶋秀夫・森下正康 2004 新心理学ライブラリ 3 児童心理学への招待 [改訂版] 一学童期の発達と生活—サイエンス社
- 中村佳子・浦光博 2000 ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から— 社会心理学研究 15, 3, 151-163.
- 落合良行・楠見孝 1995 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期 89-92.
- 大石展緒・都竹裕生 2009 Amosで学ぶ調査系データ解析 東京図書株式会社
- 小塩真司 2008 はじめての共分散構造分析—Amosによるパス解析 東京図書株式会社

- Sarason, B.R., Pierce, G.R., Shearin, E.N., Sarason, I.G., Waltz, J.A., & Poppe, L. 1991 Perceived Social Support and Working Models of Self and Actual Others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 2, 273-287.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究 65, 54-60.
- 白井利明 2003 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究(V)—卒業前後4年間のアイデンティティと時間的展望の規定関係— 大阪教育大学紀要 第IV部門 52, 1, 23-31.
- 白井利明 2006 現代社会における青年期の不安と自己—進学競争のもとでの時間的展望— 心理科学 26, 1, 13-25.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究 9, 1, 45-55.
- 杉村和美 1999 第3章 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子(編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での成熟— 北大路書房
- 杉村和美 2001 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因 発達心理学研究 12, 2, 87-98.
- 杉山成 1995 時間的展望の関連要因に関する研究の動向 立教大学心理学科研究年報 38, 39-52.
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成— 教育心理学研究 49, 265-273.
- 谷冬彦 2008 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版 16-22, 49-65.
- 豊田秀樹 2007 共分散構造分析 [Amos編] —構造方程式モデリング— 東京図書株式会社

謝辞

本論文の作成にあたり、貴重なご助言をいただきました。京都女子大学大学院発達教育学研究科教授吉村英先生に心より感謝申し上げます。また、調査にご協力くださいました皆様に御礼申し上げます。